

孔経緯 著

『新編中国東北地区経済史』

長春 吉林教育出版社 1994年 756ページ

塚瀬 進

I 本書の構成

中国東北地域（以下、東北）^(注1)はかつて「満州」とも呼ばれ、日本人にとっては日露戦争以後、南満州鉄道（満鉄）の経営を始めたこと、1931年の「満州事変」以降は日本のつくった傀儡国家「満州国」の統治する地域となったことなどから係わりの深い地域でもある。日本における東北研究は、戦前に「満鮮史」が興隆したことからも明らかのように、その蓄積には膨大なものがある。しかしながら、長い歴史的な視野から東北の変化を考えていこうとする研究は現在においても少ない。信頼できる通史をあげるとすれば、戦前の1935年に出版された稲葉岩吉『増訂満州発達史』（日本評論社）ぐらいであろうか（もっともこの著作には「満州国」期についての叙述は存在しない）。このような状況は、植民地史研究であれば「満州国」期を、清代史研究であれば辛亥革命までといった、地域を歴史的な連続性からとらえる観点に乏しいという、戦後の日本における東北研究の偏重性を反映していると言えないだろうか。

本書は清代から中華人民共和国成立以降の現在までをカバーする、756ページに及ぶ大著である。著者の孔経緯氏は1927年に生まれ、50年代から吉林大学経済研究所で東北経済史研究に従事してきた人である。著者には中国経済史、東北経済史に関する多数の論文、著書があり、これらは日本においても高く評価されている^(注2)。著者は1986年に『東北経済史』（成都 四川人民出版社）という東北経済の通史をすでに出版しており^(注3)、本書はこの前著に加筆、補充し、現在にまで及ぶ東北経済史像を構築しようという労作である。まずは篇別構成についてみ

てみたい。

総述 中国東北における社会経済の変化

第一篇 清朝入関以前および清代の東北経済の発展

第一章 清朝入関以前およびアヘン戦争以前の東北経済

第二章 アヘン戦争から辛亥革命までの東北経済の変化

第二篇 民国期の東北経済の変化

第一章 辛亥革命から1919年までの東北経済の発展

第二章 1919年から「満州事変」までの東北経済

第三篇 「満州国」期における東北経済の特異な歩み

第一章 「満州事変」から1937年までの植民地経済の形成と拡大

第二章 1937年から1945年までの植民地経済の深化と進展

第四篇 解放戦争期の東北経済

第一章 国民党統治区の経済

第二章 解放区の経済

第五篇 中華人民共和国期における東北の資源利用と経済成長

第一章 遼寧省

第二章 吉林省

第三章 黒龍江省

第四章 内モンゴル地方

余 篇 中国東北における東北アジア経済の影響および旧ソ連との貿易関係

一 19世紀末から1980年代までの中国東北における東北アジア経済の影響

二 1920年代から80年代までの中国東北と旧ソ連の貿易関係

余 論 1920年代から50年代までの中国東北経済の発展過程における連続性と断絶性

主に清代を対象とする第1篇では、まず清朝の入関からアヘン戦争に至る順治、康熙、乾隆年間の土地経営、農業経営の変化について説明する。筆者は

入関後の東北における土地体系を「官地」（清朝王公が直轄する土地で、官荘、蒙地なども含めている）、「一般旗地」（清朝王公以外の旗人が管轄する土地）、「民地」（民間が管理する土地）の3つに分けて解説している。そして「官地」、「一般旗地」における農業生産、経営状況について述べ、アヘン戦争前にすでに旗地制度が崩れ始めていたため、それらの一部分が民地へと転換しつつあったことを指摘している。続いていくつかの産業の勃興について考察し、火薬業、採炭業、打鉄業、紡織業、製塩業、金融業、輸送業、酒造業（焼鍋）、油房業、商業などについて詳しくその軌跡を記している。酒造業、油房業などの手工業経営は関内から移住してきた雑貨商によって起業されたものが多いとし、商業から手工業に手を伸ばしていった商人が資本主義的生産関係を生み出す担い手となったとする。

次いで第2章では、アヘン戦争から辛亥革命までの期間に、どのように東北経済が変化したかについて述べている。遼寧、吉林、黒龍江、内モンゴルの各地ごとに史料に即しつつ、アヘン戦争後、東北への移民が増え、大規模な開拓が行なわれるようになり、旗地が民地へと変化していった経過をたどり、しだいに関内と同じ封建的土地所有関係が拡大していったことを明らかにしている。次に商工業や金融業の発展状況について述べ、かかる商工業、金融業の発展は同時に関内との交易をも密接なものとしたことを説明する。アヘン戦争から辛亥革命に至る期間はロシアと日本の経済勢力が東北に登場した時期でもあり、これら外国資本の活動についても詳述している。ロシア資本の活動については中東鉄道（東清鉄道）に付随した林業、鉱業、工業の状況を、日本資本に関しては満鉄や日本との貿易関係の伸長について述べ、このような活動を通して東北経済の植民地化の端緒が開かれたとする。

中華民国期をあつかう第2篇は、1919年までの状況を述べる第1章と、同年から「満州事変」までの状況について述べる第2章の2つに分かれている。第1章、第2章の構成はともに第1篇第2章の構成とほぼ同じであり、農業、工業、金融、商業、貿易、税金、外国資本の順にそれぞれの状況について記述

している。どの箇所も档案史料などを丹念に使うて書かれており、東北各地の状況を全体的に明らかにしようとしている。記述の基本的な論調は、東北経済の発展を示すことにあると読みとれる。「満州事変」までの期間をあつかう第2章では、この時期に日本の経済勢力が著しく増大している点をとくに強調している。著者は「満州事変」を、より一層の勢力拡大を考える日本資本によって行なわれた東北制圧と考えているようである。

第3篇では「満州国」期の経済的变化を、1931～37年をあつかう第1章と37～45年をあつかう第2章に分けて叙述している。第1章と第2章の構成はほぼ同じであり、まず（とりわけ満鉄を中心とした）日本資本の勢力が拡大し、日本以外の国の経済勢力は衰退、消滅していったことを述べる。次いで「満州国」期の特徴である工業化政策と工業の発展状況について述べ、金融、貿易、商業、農業の各分野の動向についてそれぞれ詳述する。著者の「満州国」期経済の理解は、日本は「満州国」以前に構築されていた東北経済を基盤として、それを活用しつつ自らの経済的要求を追加し、戦争遂行に不可欠な重工業の建設、拡大を行なったのだというものである。そして重工業の育成を試みたことが、イギリスなどの植民地経営と異なる特質だとしている。付け加えるまでもなく、かかる理解は日本でも常識すぎるくらいに共通したものである。また注目される論点として、「民族資本」は大きな制約や干渉を受けながらも、その発展を模索していたのであり、植民地化によって単純に押し潰されたわけではないことを主張している点があげられる（412、434、436ページ）。

第4篇は、内戦期の経済状況を国民党統治区と解放区に分けて考察している。叙述の進め方は先の各篇とほぼ同じで、農業、工業、商業、貿易、金融などの分野別に述べている。そして国民党統治区では、1946年後半から47年前半にかけて経済状況は回復するものの、47年後半以降国民党が軍事的劣勢に立たされたことから各産業の状況は悪化していったとする。工業や農業の生産回復にあたって、国民党が行なった資金供与は大きな意味を持っていたと評価する点は、国民党イコール「悪者」という政治的なイ

メージの相対化をうかがうことができる。

共産党の掌握下にあった解放区については、まず土地改革の経緯について触れ、工業、交通、商業、貿易、財政などの各部門別にそれぞれの状況を述べている。この部分の叙述は国民党統治区の叙述に比べて簡単であり、従前の執拗なまでに事実即した記述と比較するとやや意外な印象を受ける。その理由は明らかではないが、史料的な問題によるのではないかと評者は推測する。国民党統治区に関しては、「東北行轅経済委員会档案」（遼寧省档案馆所蔵）、「国民党資源委員会档案」（中国第二歴史档案馆所蔵）などの国民党が残した档案を利用することにより、かなりの事実を知ることができる。これに対して解放区については、利用できる档案があまりにも膨大に存在するため、これらから解放区の経済状況を再構成する事実を抽出することは未だ難しいのが現状である。それゆえか、解放区の部分には朱建華主編『東北解放区財政経済史稿』（哈爾濱 黒龍江人民出版社 1987年）を頻繁に参照しており、一次史料を尊重する著者らしくない書きぶりである。

第5篇では、中華人民共和国以降の経済状況について遼寧省、吉林省、黒龍江省、内モンゴル地方の4つに分けて述べている。ここでは統計数字を利用して、概ね1980年代後半までの農業、工業、貿易などの発展動向を産業部門別に説明している。

余篇では主に対外経済関係を軸として、1980年代までの東北経済の動向を検討している。とくに旧ソ連との貿易をみつかった箇所は、1920年代から80年代までの対ソ貿易の変遷を簡潔に示している。1920年代には東北からソ連への輸出は食糧品、輸入は機械製品という傾向があったが、80年代になると食糧品に加えて中国製品の輸出が増加し、鋼材などの工業原料を輸入するようになったことを指摘している。これらは、東北経済の性格変化を考える上で興味深い現象であると言えよう。

余論は、1920年代から50年代までの東北経済を、地域経済の連続性と断絶性から考察する試みを行なっている。著者によれば、およそ社会経済の発展過程において連続性と断絶性は必ず存在するものであるが、どちらの性質が強く作用するかはその時々の

政治的、社会経済的状况によって異なるとし、東北経済について連続性と断絶性がどのような影響を及ぼしていたのかについて説明している。具体的には農業、工業、交通、金融、商業、貿易の各産業について、東北各地での1920年代から50年代の推移を叙述している。結論はとくになく、各産業ごとに1920年代から50年代の変化について跡づけた結果、東北経済のいかなる特徴を指摘しようとしたのかは不明である。

II 本書の特徴

本書は1986年に出版された『東北経済史』（以下、前著）をベースにして書かれており、前著と同じ部分も多いが、書き改めたり、追加が行なわれている部分もある。第1篇では商業の発展状況などについて、前著では利用していなかった档案を使って事実を補っている（42～44ページ）。とくに93～118ページまでの商業や対外貿易関係を扱った部分は書き増しが行なわれ、前著の叙述をかなり補充している。第2篇、第3篇はほぼ前著と同じであり、めだつた追加は第3篇の519～538ページに、1942年時点での奉天、新京（長春）、哈爾濱における中国資本の企業リストが加えられている点である。第4篇、第5篇、余篇は前著にはなく、新たに追加された部分である。

前著では1945年の「満州国」崩壊までしかカバーしていなかったが、本書では内戦期や中華人民共和国以降の時期まで検討し、現在の状況をも展望しようとしている。また余篇は、近年注目を集めている東北アジア経済圏構想を念頭に書かれていると考えられる。対外経済関係の推移が東北経済とどのような関係を持っていたかについては前著でも考慮されていたが、この余篇を読むことによってより簡潔に知ることができる。

本書の構成は、前著出版以後の著者の問題関心の変化をあらわしていると考えられる。つまり現在の東北経済において、過去の東北経済はどのような影響を及ぼしているのか、影響力を残しているのはどの部分であり、そしてなぜその部分が影響力を残し

ているのか、という問題意識であると評者は考える。かかる問題意識がもっとも鮮明にあらわれているのは、余論の連続性と断絶性についての論考である。本書では具体的な見解は提示されていないが、一昨年8月に長春で開催された東北3省中国経済史学会の報告では、この問題については今後とくに考察を加えたいとしていた^(if4)。

本書の特色としては、事実に対する著者の執念がまずあげられる。膨大な档案、地方志、刊行物を消化して事実を追跡していく著者のエネルギーには感嘆せざるをえない。しかしながら、本書に記述された多くの事実の相互関係がどのようであったのかについてはあまり述べられていない。これらをどのように解釈し、どのように東北経済史像を考えていくかについては、我々にとっても著者にとっても今後の課題となっていると言えよう。

本書は多量の史料を駆使している一方で、中国国内または外国の研究成果をほとんど典拠としてあげていない。それらも参照してはいるが、一次史料を第1とすることから脚注には記述しないのか、はたまた他人の研究は依拠するに足らないと考えているのか、著者がどのように考えているかは不明である。しかしながら中国においても優れた成果、例えば解学詩・張克良編著『鞍鋼史(1909～1948年)』(北京冶金工業出版社 1984年)、蘇崇民『滿鉄史』(北京中華書局 1990年)など、水準の高い研究もある。また「満州国」期についての研究は、日本においても優れたものが存在する。総じて中国の研究は、研究史に対する考慮が不足していることが多いが、今後は自己の見解を研究史上にどのように位置づけるかについても留意してもらいたい。

III 問題点

以下では本書の問題点についていくつか述べてみたい。

まず、著者は清代の土地体系を説明するのに「官地」、「一般旗地」、「民地」という分類をしている。日本では土地に対する権利関係から「官地」、「民地」の2種類に大別し、「一般旗地」は「官地」の中に

含める見解が一般的である。著者の定義する「官地」は一般的には王公荘園と呼ばれるものであり、これに各種官荘、旗地、職田などを加えたものを総称して「官地」と呼び、この一方で「民地」が存在するというのが標準的な理解であると評者は考えている。著者は土地に対する支配権の強弱から「官地」と「一般旗地」の区別を主張しているが、そのように区別するのならば「官地」に官荘まで含めることはどうであろうか。吉林官荘、黒龍江官荘は駐防八旗の食糧供給を目的としており、内務府官荘や盛京戸部官荘とは異なる性格のものである。清朝崩壊後、内務府官荘などは清朝の私有地と認められたのに対して、吉林官荘、黒龍江官荘は公有地とみなされた点からも、同じ官荘といっても土地所有の性格はそれぞれ相違していたことを知ることができる。またモンゴル人王公の管理する蒙地を「官地」と考え、清朝皇室が管轄していた土地と一括して分類する点についても疑問である。

次に時期区分についてみてみたい。本書の構成にあらわれているように、著者は以下の時期区分をしていると考えられる。

- (1) 清朝期
 - (i) 清朝入関～アヘン戦争
 - (ii) アヘン戦争～辛亥革命
- (2) 民国期
 - (i) 辛亥革命～1919年
 - (ii) 1919年～「満州事変」
- (3) 「満州国」期
 - (i) 「満州事変」～1937年
 - (ii) 1937年～1945年
- (4) 内戦期
- (5) 人民共和國期

(2)から(5)については評者も同様に考えており、また現在もっとも賛同を得ている時期区分であると思う。しかし清朝期を区分するに際して、アヘン戦争をもって画期とすることには疑問である。おそらく著者は、中国経済史全体の視野から、とりわけ関内経済と東北経済の平行的発展を強調するゆえに、アヘン戦争を画期と考えたのではないかと評者は推測する^(if5)。だがアヘン戦争が東北経済に及ぼした影響は大きなものではなく、対外経済関係の変化を指標とするならば1861年の営口開港を画期とするほうが妥当であるとする。営口開港をもって区分する

考え方は中国の学会にも存在し、近年ではこの区分のほうが有力視されているようである^(注6)。

すでに指摘したが、本書の特徴は、多くの事実に基づいて東北経済の変化を叙述している点にある。だが各産業の状況は、時期区分にしたがって列挙されているにすぎないことが多い。いったい各産業はどのような要因から変化していたのか、また各産業間の結び付きはどのようなものであったのかなどには答えておらず、総じて立体的、構造的な分析に乏しい。例えば金融業については、各時期ごとに銭鋪がどこにどれだけあったとか、どの銀行がどのような紙幣をどれだけ発行していたかなどについては詳しく述べているが、このような金融業の発展が商業や農業にいかなる影響を及ぼしていたかについては明らかにしていない。評者はかつて農業、商業、金融の連関を、鉄道を軸にして考察したことがあるが、著者はかかる理解に対しては冷淡であった^(注7)。

東北経済の構造を分析するにあたって、著者も現在の中国で一般的に使われている「民族資本」、「官僚資本」という概念を用いている。本書の叙述は、主に各産業の発展動向を数量的に示す方法がとられていることから、「官僚資本」の成長とか「民族資本」の衰退という指摘にとどまり、かかる資本の盛衰が東北経済に対してどのような構造的変化をもたらしたかなどについては説明されていない。また仮にこのような概念を使用して東北経済の構造を明らかにするとしても、中華人民共和国以降についてもかかる方法は有効であろうか。周知のように、日本における研究では「民族資本」、「官僚資本」というように政治的な観点から資本の性格を判別する方法は、最終的には資本の政治性がポイントとなるため、経済的分析には有効ではないという認識が定着しつつある。本書は東北経済を清朝期から現在までのパースペクティブをもって考察するという、これまでの研究史を大きく前進させる画期的な観点を持つ著作であるがゆえに、分析視角についても新たな観点を提出してもらいたかった。

国民経済という枠組がゆらぎ、地域経済に注目が集まる最近のアジア経済であるが、地域経済の活動は近年突如として形成されたのではなく、歴史的に

形成されてきたものが顕在化してきたと言うことができよう。地域経済を研究するには、それを形成してきた歴史的な背景に配慮しながら現在の状況を考えることが何よりも求められている。本書は歴史学を学ぶ者だけでなく、現状分析をしている人にも参照していただきたい。

(注1) 日本語では中国東北地域と言い、「地区」という表現はあまり使わない。しかし中国語では、本書の書名にもあるように中国東北地区という表現が使われる。現在の中国語にも「地域」という語句は存在するが、使われることは多くないようである。「地区」より広い地域を表す時には、「区域」が多く使われる。例えば、東北アジア地域は東北亜区域と表記されることが多い。

(注2) 「1931至1945年間日本帝国主義移民我国東北的侵略活動」(『歴史研究』1961年第3期)などは先駆的に「満州開拓日本人移民」について考察を加えた研究であり、日本人研究者もよく参照している。

(注3) 孔経緯氏はより詳細な東北経済史の通史の完成を考え、東北経済史の研究者を組織して4巻構成の「中国東北地区経済史」を出版しようとしていた。第1巻にあたる孔経緯主編「清代東北地区経済史」(哈爾濱 黒龍江人民出版社 1990年)は出版されたが、第2巻「民国時期東北地区経済史」、第3巻「偽滿時期東北地区経済史」、第4巻「解放戦争时期的東北国統区経済」は現在でも未刊である。一昨年孔経緯氏とお会いした際、未刊行の第2～4巻は出版経費の関係から見送られているとのことを知った。

(注4) この時の学会報告で孔経緯氏が主張した論点は多岐に及ぶ。詳しくは「中国経済史と東北経済史研究的走向」(『長白叢書』1994年第6期)を参照。

(注5) 孔経緯「東北地区資本主義発展同関内広大地区資本主義発展的統一性と差異性」(『中国資本主義史綱要』長春 吉林文史出版社 1988年)。

(注6) 例えば、衣保中『東北農業近代化研究』(長春 吉林文史出版社 1990年)などを参照。

(注7) 評者の見解については、拙著『中国近代東北経済史研究——鉄道敷設と中国東北経済の変化——』(東方書店 1993年)を参照。評者は東北三省中国経済史学会(1994年8月)の際に著者と議論をする機会を持ったが、双方の見解の相違をふまえて共通の理解に至るまでの議論をすることはできなかった。

(文化女子大学非常勤講師)